

## <書評>

米国人が語る日本の歴史：来るべき日本の悪夢―統一朝鮮

マックス・フォン・シューラー

ハート出版

書評者：Tadashi Hama（日本語訳：発信する会）

文在寅は、西欧のメディアからは、韓国の「人権派弁護士」として賞賛されている。大統領に選出されたのは2017年だったが、2018年には三回にわたって北朝鮮の最高指導者金正恩と会見している。2019年にも四回の会談が予定されている。文が金との公開の会談を願うのは、早急に朝鮮の統一を実現しようという意図を持っているからである。

朝鮮の再統一が達成されたら、重大な歴史的転換点を迎えることになるだろう。1990年のドイツの平和的統一の再来である。南北朝鮮が再統一されたら、東アジアの地政学は激変することになるだろう。ひょっとすると、地域的な核戦争の恐れが緩和されるかも知れない。そればかりではない。東アジアに新しい繁栄の時代、言い換えれば「経済的な奇蹟」が起こるのではないかと期待する向きも少なくない。<sup>1</sup> 韓国の前大統領朴槿恵や外国の情報筋がその代表である。

統一朝鮮では、金正恩がリーダーシップを取ることになるだろう。ニコラエ・チャウシェスクやムアンマル・カダフィが自国民の手で悲惨な最期を遂げることになった先例があるのだから、金が権力を「人民」に譲り渡すことがあろうとは考えられない。金が政治的支配を続けるにせよ、他の支配者が出現するにせよ、再統一という言葉に浮かれた人々の中には、南北どちら側にも激しい不満が渦巻く未来を警戒する者はほとんどいない。南側では、近代化と統合のために膨大なコストを負担しなければならなくなる。北側では、虐げられた社会的経済的地位が速やかに改善されるとは思えない。無分別かつ野放図な「平和的」再統一が進んだならば、1953年の講和以来休戦状態にあった悪夢の内戦が蘇ることもあり得る。

著者のマックス・フォン・シューラーは、文の軽率な画策に対して警告を発している。統一を急げば、厄介な事態を引き起こす可能性があるというのである。同時に、日本に対する敵愾心が募り、北朝鮮への宥和策が進めば、ついには日本に対して侵略を開始しかねないと憂慮している。フォン・シューラーは、統一後の極左政権は、国民の団結を固めるために、日本をスケープゴートに仕立て上げようとするだろうと予測する。そればかりではない。フォン・シューラーによると、日本の左翼は、統一朝鮮の反日プロパガンダを忠実に国内に拡散し、それがまた、日本国内の日本人と在日朝鮮人の暴力的な衝突を招くことになる。

---

<sup>1</sup> 「韓国の経済は減速している。指導者はいまだに平壤に膨大な膨大な金をつぎ込もうとしている」 (Oct. 3, 2018. <https://www.cnn.com/2018/10/04/south-korea-aims-to-spend-millions-on-north-korea-projects.html>.)

「分析 性急な統一は南北朝鮮の両方に『災害』をもたらす危険がある」 (Feb. 27, 2019. [https://www.upi.com/Top\\_News/World-News/2019/02/27/Analysts-Hasty-unification-could-spell-disaster-for-both-Koreas/7071551262577/](https://www.upi.com/Top_News/World-News/2019/02/27/Analysts-Hasty-unification-could-spell-disaster-for-both-Koreas/7071551262577/))

このように、日本国内では反日勢力が騒擾状態を作り出し、その一方では、半島での混乱を避けて、多数の朝鮮人が日本に逃げてくる。統一朝鮮政府は、機は熟したりと見て、「在日朝鮮人を保護」という名目で、九州に侵入して来るだろう。フォン・シューラーは、このような日本への侵略を仮定し、その侵略が進行している間に、どのように事態が発展して行くかを二つの面から分析している。日本人読者のためには、現在の政治状況をふまえた上で、韓国・北朝鮮と米国がどのような行動に出る可能性があるかを分析する。一方、日本人以外の読者のためには、日本の歴史を広く解説してくれている。日本人以外の読者にとってとくに勉強になるのは、いわゆる「平和」憲法の歴史を説いてくれている点である。この憲法によって、日本は「戦力」を保有することを禁じられている。米国から押し付けられたこの憲法のおかげで日本がどんな道を進んできたかを見てみれば、読者は、日本国憲法というものが、戦後の米国による占領の遺物であることをよく理解するだろう。予見しうる限りの未来において、日本社会を拘束する桎梏となったのである。こんなふうには話しても、全貌は掴みにくいだろう。戦争が起こると言われても、実感は湧かない。しかし、しばらく距離を置いて俯瞰してみると、断片的なメッセージが整理されて、一つの明白なポイントが浮かび上がる。統一朝鮮は朝鮮人にとっては夢であるが、日本にとっては悪夢だということである。

フォン・シューラーはすでに日本人に宛てて、現代の米国の政治状況を解説している。『アメリカ人が語る：アメリカが隠しておきたい日本の歴史』「The Japanese History That Some Want Hidden」(Heart Publishers, 2016) や『アメリカ人が語る：日本人に隠しておけないアメリカの崩壊』「Second Civil War: Battle for America」(Heart Publishers, 2017) などの著書がそれである。米国大統領選挙からもう二年になるが、フォン・シューラーによると、左翼平等主義者を中心とする知識人は、今なおドナルド・トランプが米国の大統領であることを認めようとはしない。シューラーが甚だ遺憾に思っていることは、大統領が共和党であるのに、左翼の知識人が米国の社会的政治的な言論界を牛耳っていることである。左翼は「多様性」とか「多文化」とかいうキャッチフレーズが大好きだ。フォン・シューラーの危惧することは、こういうキャッチフレーズにたぶらかされて、米国の政府も軍部も、その資格も能力、実績もない人間を「社会を反映させる」(社会の構成に合わせる)て、政府や軍に雇い入れるようになってきていることである。政府や軍がそういう状況になったら、米国は韓国・日本に対する条約上の義務を放棄することにもなるだろう。そうなれば、過激派が統一朝鮮を支配し、日本を侵略する事態を招く可能性が高まると本書は示唆するのである。

フォン・シューラーは元海兵隊員であり、それだけに経験もあり、言葉には重みがある。「多文化」や「男女同権」(ジェンダー平等)が米軍の戦闘能力にどのような影響を及ぼすかの記述は大いに説得力がある。資格や経験があろうとなかろうと、ひたすら「平等の結果」と「無差別包括性」<sup>2</sup>を求めるような政策

---

<sup>2</sup> ミチエル, B(1989) 弱い結合：アメリカ軍のフェミニズム化。ワシントン, DC (レグナリ)  
ミチエル, B(1997), 軍における女性：災厄との戯れ, ワシントン, DC (レグナリ)

を米国が採用することになったら、どんな弊害が生じるかについて、本書が明らかにしてくれるのは、氷山の一角に過ぎない。男女を問わずハンディキャップのある人々に、完全武装の身支度をするように要求することは、あまりにも無理がある。しかし、左翼の知識人にとっては、こういう「不平等」は是正しなければならない。現行の装備の基準自体が「女性差別」なのだから、その基準を緩和する必要がある<sup>3</sup> と彼らは考えているとフォン・シューラー指摘する。最近の新しいイデオロギーからするならば、軍でも非軍事部門でも、従来の基準はすべて不合格である。不合格だから改革しなければならないとなると、仕事の質や効率がどこまで低下するかは、考えるだに肌粟を生ずるものがある。

米国は今、人間性と歴史に対する誤解に基づいて、空疎なイデオロギーの掃き溜めと化しつつある。そのような例は、外にも枚挙するに遑（いとま）がないとフォン・シューラーは言う。本書の日本人読者は、「多文化」とか「多様性」とか言った西欧の概念が、果たして日本にも当てはまるものかと胸に手を当てて考えてみて欲しいものだ。ヨーロッパ諸国で、「多文化」と「多様性」がどんな結果を生んでいるかは、あれだけテロが頻発しているのを見れば、誰の目にも明らかである。また、アメリカが暴力犯罪の国になってしまったのも、その結果であることは言を待たない。米国のフェミニストたちは、どの人種たるを問わず、金切り声で叫び立て、真面目な白人男性を殺しても構わないとまで極言するのである。現在、欧米の白人が大量殺人を犯す事件がしばしば発生する。これは、自分たちの国がどんどん変貌して行くことに危機感を抱いて逆上しているのである。もちろん肯定することはできないが、予測可能なことではあった。

---

フォン・シューラーは、2017年に米海軍の二隻の艦艇・ジョン・S・マケインとフィッツジェラルドが衝突した事故に言及している。この事故は17名の死者を出している。おそらくは適正を重視するよりも、差別として糾弾されることを恐れた配慮によって昇進させたことが重大事故の一因になっているのだろう、とフォン・シューラーは指摘する。衝突したときのフィッツジェラルドの当直将校はサラ・コップック大尉だった。彼女は書面で叱責され、罰金を徴収された。フィッツジェラルドの戦闘指揮所（軍艦の神経中枢）の担当だったナタリー・コームズ大尉とブライス・ベンソン中佐は書面で訓戒された。「海軍は、7名の死者を出した米艦フィッツジェラルドの衝突事件について、刑事事件として告発するには至らなかった」副司令官のジェシー・L・サンチェス中佐（プエルトリコのバヤモン出身）は、職務怠慢の容疑で有罪になった。最後に、上等兵曹ジェフリー・D・バトラー（アフリカ系アメリカ人）も職務怠慢の容疑を認めた。バトラー上等兵曹は、統合ブリッジと航海システムの使用および訓練の責任者だった。しかし、バトラーは、統合ブリッジと航海システムに関する適切な訓練を受けておらず、そのことを遺憾に思っていると自認した。「米艦ジョン・S・マケインの上等兵曹は、軍事法廷で有罪となり、降格処分に付された。海軍軍人の死者数は12人を超えたのに、その死に関しては、誰も訴追されず、また直接の責任を問われることもなかった。関係者がどんな人々であったかを知れば、また本書を読めば、その理由も察せられるというものである。新兵の男女別体力と米国海軍の体力要件を詳細に知るためには、Gregor, W. J. (2011)の「なぜ改善されないのか。女性の軍務に関する体力適性の測定」を参照されたし。

<sup>3</sup> 男性と女性採用者の体力差と米軍の体力要求度については、ジョージ, W.J.(2011)「なぜなにもなされないのか？女性兵士の体力度を測定する」を参照のこと。

本書を読み、歴史というものを考えてみると、心にうなづかれるものがあるはずだ。それは、たとえば戦争のような事態を回避するために一番頼りにならないものは一般の人々の反応だということである。国民は、自分たちの魂に訴えかけ、恐怖心を煽り立てるカリスマ的指導者のもとに結集するのが常である。米国の知識人と彼らの民主党は、ドナルド・トランプが大統領に選ばれた時には仰天した。かれらは、なにが米国にとって最善かを知っていると信じ込んでいた。しかし、米国国民の大多数はそんなことは思っていなかったのだ。

統一朝鮮が日本を侵略した場合に、どのような結果が生ずるかは、さまざまな要素で決まる。フォン・シューラーは、特に三つの要素を指摘する。第一には、在日米軍が政治的にポリティカル・コレクティヴの影響にどれだけ抵抗行動をとれるかである。第二には、自衛隊がどう出るかである。第三には日本の国民と半島から逃げてきた朝鮮人の動向である。

フォン・シューラーの予測は楽観的に過ぎるかも知れない。たとえば、日本の民間人は、本土を侵略された場合には祖国を守るために結集はするであろう。しかし、何世代にもわたって平和が続いたために、国家意識・国民意識は著しく弱まってしまっている。一将来の日本人は、九州が朝鮮に併合されても、拱手傍観することになるだろう。日本人は「罪の意識」で麻痺してしまっている。きっと、肩をすくめて、「『過去の悪事』の償いをするためには、このくらいのことは仕方がない」と言うことであろう。また、フォン・シューラーは、自衛隊は見事な戦績を挙げるだろうと断言する。とりわけ、敵が十分な訓練を受けていない徴兵の集まりなのだから、なおさらのことだ。フォン・シューラーはさらに進んで、現在の世代が積極的に軍務に就こうという情熱を持っていないことを指摘する。最後になるが、朝鮮の再統一が進んでいる間、およびその後になっても、難民が朝鮮海峡を渡って、怒涛のように日本に押し寄せるであろう。その場合、日本政府は彼らを受け入れるのだろうか。2015年から2016年にかけて、中東とアフリカの難民がヨーロッパに流入した後、ヨーロッパは社会的経済的に恐るべきダメージを受けた。それを考えてみると、パンドラの箱を目の前にした日本政府がどう出るかは興味深いものがある。

現在米国を席捲している社会的政治的な騒動が、米国だけに限定されている間は、外国人は高みの見物を決め込んでいられるだろう。ところが、現代は世界中がつながっている時代である。米国の理想主義は日本の知識人にも伝染する。今では日本の知識人は、同化しにくい諸民族にも門戸を開いて移民を受け入れ、多文化と多様性を尊重すべきだと考えている。女性と少数者に「平等な結果 (or 結果の平等)」を保証し、「性的多様性」にもっと寛大になるべきだというのである。

そればかりではない。伝統的な家族の単位を解体させ、かつは、伝統的な日本文化を斥けて、外国のジャンク・ポップ文化を導入しようという声が高まっている。西欧社会は、現在の西欧を支配するドグマに従って来たからこそ健全な社会に育ったのである。日本人でもまともな人なら、そのことは分かっているはずである。日本は西歐的なものをどんどん受け入れていることで世界に知られている

が、だからと言って、西歐的なものなら「何でもかんでも」受け入れることが本当に必要なものだろうか。